Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞松原秀江著『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	語文. 1999, 73, p. 53-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68956
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

紹介

松原秀江著『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』

箕浦尚美

本書の書名は、「『薄雪物語』を中心に、御伽草子・仮名草子についての論文を集め」（本書二八二頁）た論文集であることによって名付けられているが、実際の内容は、『薄雪物語』を基盤として近世の草子文芸史全般を論じた研究であると言えるだろう。

まず、第一章に、中核となる『薄雪物語』に関する論考を置く。『薄雪物語』は著者の研究の出発点でもある。五十種近くもの伝本の詳細な分析には敬服するばかりだが、『薄雪物語』は、江戸時代を通じて読まれたロングセラーで、「娯楽的・実用的・啓蒙的な要素をかねそなえる仮名草子中の仮名草子」（本書七五頁）とも言える作品であることは疑いなく、『薄雪物語』の分析は仮名草子全般を論じることに繋がると考えられる。

「『薄雪物語』の挿絵」では、諸伝本の挿絵を比較することによって、先行する版の挿絵を利用することの多い近世の出版の実態を示すとともに、新たに作られる版には異版意識があり、世の中の好みや動きを敏感に反映していることを指摘する。その上で、『薄雪物語』のどのような側面が世に求められていたのかを、諸版の図柄の違いから読み取る。例えば、文使いの挿絵が多い版には艶書文範としての実用性、筋の展開に沿って挿絵が構成される版には物語性、古典の一場面を描いた絵が多い版には啓蒙性が、各々、重視されていると分析する。仮名草子の性格を、挿絵という観点から見事に浮かび上がらせた論考と言えよう。本稿は、労作「『薄雪物語』版本考」と併せて読むことで、各々の刊行時期、出版者、本の形態などの、より具体的な条件が加えられ、いっそう興味深い内容となる。

「御伽草子・仮名草子における所謂六段本について」「御伽草子『はちかづき』の草双紙への展開——西村屋與八版を中心に——」（第二章）は、『薄雪物語』研究の場合と同じように、諸伝本の比較を通して近世の草子享受の変遷を分析した論考である。後者では、諸本の挿絵や本文の検討を通して、御伽草子から草双紙への展開を具体的に辿ってゆく作業によって、丁数が少なく挿絵に重点が置かれる草双紙の特徴を明らかにする。

著者の関心は、個々の作品や近世の出版の分析だけにはとどまらない。むしろ、仮名草子の精神、近世の文化、価値観などにあることが、どの論考からも看取される。そのなかで、特に、「江戸時代における女性の文学的教養について——狭義の頭書形式の版本を中心に——」（第二章）「仮名草子における儒教と仏教のかかわりについて」「仮名草子の文学観」（第四章）は、著者の文学観を述べた論として位置付けられるだろう。

その他、作品論として、「『薄雪物語』とものあはれ」（第一章）「観音利生譚『はちかづき』論——方便力としての「鉢」の意味を中心に——」「『浮世物語』論——浮世と人の心とのかかわりについて——」（第三章）「心と言の葉——『和歌威徳物語』を中心に——」（第四章）を収める。（一九九七年七月、和泉書院、三三一頁、一二〇〇〇円）

——本学大学院博士後期課程——